

る。つまり地域の期待を担った学校という風情なのだ。

さて、「教育が過疎を助長する」という発言も聞かれる昨今だが、だからといって教育は地方から撤退、とはいくまい。都市と地方の格差が広がるし、読み書きソロバンだつてまだまだしつかりとやらなければならぬ。しかもわれわれは今、農業ですら経営的センスが求められる時代を迎えようとしているのである。肥大化した都市の行きづまりが叫ばれて久しいが、これから未来のヴィジョンに夢が持てるのは、地域の活きづいていく場所になるのではなからうか。「さめこう」の役割もこれからかえって大きくなるに違いない。

ところで私は大学時代、モンゴルの首都ウランバートルに住んだことがある。中心街の道端に牛が寝ころんでいたり、バスで三十分も行くと「アルプスの少女ハイジ」の世界さながらの、牧童が羊を追う光景が広がる街だ。そこで考えたことがある。モンゴル人は遊牧で生活を支えてきた。では日本人の支えは何か、と。答えは農耕に決まっているのだが、生まれてこのかた東京・大阪と暮らしてきた自分には、足元がおぼつかない感じがしてきた。

この五月、事務の方のご好意で生まれて初めて田植え(のまねごと?)

を経験させてもらったのは、だからとても貴重な体験だったと思う。そのときのことを授業の際に生徒に話してみたら、農家の手伝いをしていく生徒でも意外に知らないでやっていることが多いようで、また驚いた。つき合っても下手で無器用な私だが少しづつ学んで、いつかは生徒と地域の未来・農の未来などを語り合えるようになりたい。今、私は鮫川高校に赴任できて、とてもよかったです思っている。

(県立東白川農商高等学校鮫川分校教諭)

子供と保健室

渡邊 サイ子



らも、日に日に大きく成長している子供たち。

そんな思春期の子供たちをパートナーにして十八年になります。何年たつても保健室には、たくさんの子供たちが集まっています。なぜ? : : きつと、保健室があまりに空閑で養護教諭というあまいな人間がいるから、緊張せずに気楽にやつてくれるのでしょうか。

しかし、保健室は子供たちにとつて、いつまでも「居心地のいい場所」であつてはいけません。本来、子供にとつて、自分の教室が一番「居心地がいい場所」であるべきです。それが、いろんなトラブルやストレスがあつて教室に自分の居場所がなくて保健室にやつてきます。

心の問題を抱えている子供たちは「私は心の問題で」とは言いません。頭痛や腹痛の身体症状を訴えます。「何かありそう」と思つても、それを性急に指摘しないで、やさしく聞くことによつて、しだいに子供たちが背負っている家族の問題、友人関係をめぐつてその心のしこり、いじめなどがみえてきます。この時点で担任の理解協力が必要です。

ほとんどの場合、子供たちは自分の心の弱さをあたため、存在を認められる大人の存在によつて、自然に立ち直り、いつの間にか保健室を

卒業し教室へ戻っていきます。(なかには、奥の深い深刻な問題もありうまくいかないことがあります。)

学校の中には役割分担があると思ひます。「学級のことはずべて担任が」という気持ちは分かります。しかし、ひとり抱え込んでしまうことには無理があると思うのです。子供たちが保健室にいたがるのはほんの一時期で、そのうち教室へ、担任のもとへ必ず帰っていきます。それを一日も早く教室へ戻れるように援助するのが保健室の役割だと思ひます。

私は、今とても居心地のいい場所です。仕事をさせていたでいます。「養護教諭でよかった」そう思えるのも、まわりのみなさんに理解され、支えられているからだと思います。このことは、子供たちにとつても共通することだと思ひます。

これからも、ひとりひとりの子供を大事にし、子供が体で語り発しているサインを見逃さず受け止めることができる柔軟な感性を持つてやつていきたい、と思ひます。

(田島町立田島中学校養護教諭)

